

自然観察 NOW

NO : 54

野幌森林公園自然情報

発行 : 2021年3月21日

北海道ボランティア・レンジャー協議会

ホームページ <http://voluran.com/>



エゾサンショウウオ

【 日本にすむサンショウウオ 】

サンショウウオは、体長1m以上を超える大型と、20cm以下の小型の二つに分けられます。オオサンショウウオは、本州に分布し、主に水中で生活します。小型のサンショウウオは日本には約40種類分布し、北海道にはエゾサンショウウオとキタサンショウウオの2種類がすんでいます。

【 エゾサンショウウオは、世界の中で北海道にしかすんでいない！ 】

エゾサンショウウオは、北海道にのみ生息しており、体長が12～20cmで、体の背面は一様に青みを帯びた暗褐色で、腹面は灰色で微細な暗褐色の点が密にあるのも多いです。足の指の数は前足が4本、後足の指は5本あります。肋条は前足と後足との間にできた「皮膚の溝」をいい、普通は11本あります。

キタサンショウウオは、世界に広く分布していますが、国内では釧路湿原のごく限られた地域しかすんでいません。体長が11～13cmで、産みつけた直後の卵のうは青白い蛍光を発しています。足の指の数は前足が4本、後足の指は4本あります。キタサンショウウオは、天然記念物に指定されています。

【 おとな（成体）のエゾサンショウウオ 】

産卵期になると雄と雌との間には、体型にはっきりした相違が現れます。雄は繁殖地へ向かう時は、スリムな体型、繁殖期の水中にいるときは頭部と胴部が平たくなり、数日経つと脇腹がしわ状の隆起（胴の側面に見られる肋条＝上記「皮膚の溝」）が鮮明になり、尾の部分は上下に広がって魚の“ひれ”に似た状態になります。水中での活動に適した体になります。一方、雌は産卵のために水中に入ると、卵の入っているお腹の部分がしだいに膨らんで、産卵直前には、はっきり膨らみが出てきます。生殖行動は夜間に行われることが多いようです。

雄の水中滞在期間は、平均6日から12日。雌は産卵を終え水中から陸に上がります。出産という大きな仕事を終えた後は、任務を終えたから水中から出るというわけだけでなく、疲労した肉体が皮膚呼吸を長く続けることが難しいことかもしれません。



【 卵が入った袋（卵のう） 】

エゾサンショウウオの卵のうは、らせん状に巻いた長いひも状で透明、かなり柔らかいです。表面にしわがあり、20～80個の卵が入っております。温度が高くなると卵の発生が早くなります。

卵のうにとって最大の敵は、トビゲラの幼虫による捕食です。特に止水性の場合は多数繁殖し、これが卵のうの中に入り込み死滅に追い込むという結果を招くことになるのです。

4週間くらいで卵のうから飛び出て幼虫になり、水中で泳ぎ始めます。ふ化後の幼虫の体長は約1.3～1.7cmほどの大きさとなります。



【 幼 生 】

産卵間もない卵は、約40日間位で、ふ化直前の幼生の姿にまで成長します。頭の後ろに「えら」を発達させ、水中の酸素を「えら」から体内に取り込むようになります。止水性では幼生は肥えて上下幅広く、エサの水生昆虫やプランクトンを容易に食べます。流水性では幼生はスマートで、エサはなかなか捕食できないので痩せる傾向になります。

ふ化後しばらくすると、幼生は「えら」の下から前足（前脚）を出して、そのあとで後足（後脚）を出します。エサ不足の幼虫は、大きな幼生が小さな幼生を丸呑みして食べる「共食い」をします。



【 幼 体 】

大きくなった幼生は、水中の酸素を取り入れるえら呼吸から、肺で呼吸する陸上生活へと変わります。陸上生活に適応した姿に変わることによって上陸生活が可能になります。

幼体は、水中から出ると繁殖場所周辺の枯葉、大きな石などの下で一晩を過ごし、翌日からは枯葉が堆積する林床でミミズ、ナメクジ、ワラジムシなどを食べる生活を始めます。

幼体の天敵は、ヘビや鳥類、アライグマなどであり、自然条件からいうと直射日光や乾燥です。寒くなると深く土中に潜ります。翌年から陸上生活をおくる成体になります。

観察会案内

4月22日(木) 春の花を見つけよう 9:50～11:00 自然ふれあい交流館集合・解散(事前申し込み制)

参考文献：ネット情報 (Wikipedia)、エゾマツ85号、北洋水族館

写真提供：自然ふれあい交流館

文責：成瀬 司